第６次飯舘村総合振興計画策定委員会　第２回議事録

日時：2019（令和元）年 11 月 15 日（金）
18：30～21：00
場所：飯舘村役場２階　第一会議室

＜出席者・席次＞

●委員長：鈴木　典夫
[有識者（福島大学）]

●菅野　典雄
[村長]（挨拶のみで退席）

副委員長：大内　亮●
[村民]

●佐川　旭
[有識者（村アドバイザー）]

●村上　早紀子
[有識者（福島大学）]

山田　豊●
[村民]

●濵田　幸成
[村民]

木幡　悦子●
[村民]

●星　貴弘
[村民]

花井　由貴●
[村民]

●佐藤　義幸
[村民]

星　弘幸●
[村民]

●髙橋　祐一
[役場職員（建設課長）]

事務局

協和コンサルタンツ

松本　義之●
[事務局（総務課企画係）]

●村山　宏行
[役場職員（復興対策課長）]

髙橋　正文●
[事務局（総務課長）]

●松下　義光
[事務局（総務課企画係長）]

1．開会	
	・事務局（松下）より開会のあいさつを行った。 ・委員長より開会のあいさつを行った。 ・村長より開会のあいさつを行った。
	村長退席。
2．計画策定の進捗報告等	
1）地域別懇談会の開催予定 **2）専門部会合同視察研修の実施予定** **3）アンケート集計の速報** **4）専門部会での検討内容（第１回・第２回）**	
	・事務局（松本）より配布資料を基に進捗報告を行ったほか、全体的な方向性として「小さくても輝く村づくり」のようなイメージで進めることを、事務局から提案した。
3．議事	
1）アンケート及び専門部会の報告について **2）村民向けの中間報告会の開催について** **3）策定委員会・専門部会の合同開催について**	
委員長	➢ 今日はアンケート及び専門部会の報告が重要な論点になるだろう。方向性として小さくても輝く村づくりということで進めてよいかも話し合いたい。 ➢ 各部会での焦点になるような話があれば、順番に話していただきたいと思う。 ➢ まず、健康福祉環境部会は、基本的にはアンケートに出ているように、医療・福祉についてはサービスの再開が共通の認識になっている。 ➢ 健康づくりについては、今ある団体の努力も含めてどんな取組みをしていけばいいかということで、食の話題が出てきている。誰かにやってもらうということではなく、高齢者自らが発信してそれをすくい上げることが大事である。 ➢ 交流も食の問題であったり、場所の問題であったり、工夫が必要である。これについても行政が全てやるのではなく、地域やボランティアなどで居場所をつくることが必要である。アンケート結果の上位にも交流とあったので、間違いないと理解している。 ➢ 村民の力を使うということで具体的にキッチンカーという言葉が出てきているがハードを整備することによってソフトの

	力が出てくるのではないか。元気になろう、心の問題、少ない人間だけでもにぎわいを取り戻したい、メンタルの活性化をしていきたい、もう一回元気をつけようという思いがつまっていると感じる。 ➢ 子育て支援については、村内村外でそれぞれ課題があるが、教育だけではなく学びの場として、子ども目線での考えが必要。 ➢ 環境に関しては、ごみやペットの問題など、もう少し幅広い議論ができるかもしれないが、いいものをもっと使っていこうということで考えている。星空を鑑賞できるようなことを売りにするなど、飯舘村の交流・自慢にもつながる。 ➢ 村内のバリアフリーに関しては、ハードではなくて心の壁への対応が必要である。
委員	➢ 産業観光移住部会では、人材確保の中で短時間だけでも働いてもらえるような人手を確保できないかという話があった。 ➢ 観光面ではきこりやあるものを活用して発信していく方法なども出ていた。 ➢ 買い物などの生活利便性も話題になっている。
委員長	➢ 集落支援員はいるのか？
事務局	➢ 現在はいない。
委員長	➢ 集落支援員の活用と記載されている。
事務局	➢ 地域おこし協力隊を考えている。
委員長	➢ 集落そのものを支援する方が必要ということか。
事務局	➢ そう考えている。
委員	➢ 教育・文化部会は、１回目では問題提起をした。２回目では学校教育について重点的に議論した。小学校に入る人が少ないという問題の他、保育園は保育士が足りず受入れ出来ないという問題も出た。また、スクールバスの通学時間の活用やGPS を設置して送迎の効率化ができないか。社会教育などライフステージの課題として、年齢ごとに生涯学習があるのではという話をしている。また、女性は参加するが男性が参加するような生涯学習の場が少ない。伝統芸能については、今後話が出てくるだろう。 ➢ 人材ということで助手や司書が欲しいという話があった。
委員	➢ 防災・建設・行財政部会は、本日３回目の部会を開催し、それぞれみなさんから深い話が出ている。安全安心、外灯の不

	足、ドローンの活用の議論も出た。先日の台風でも被害があったが、ハザードマップの整備について地区が主体となって進めていくのはどうかという話も出ている。 ➢ 足の確保では、スクールバスの空き時間の活用、新しい移動手段の確保ということで、住民が主体となった交通の仕組みの話も出た。NPO による交通の仕組みが 5 次総ではあったが、NPO でなくても可能か今後も考えていきたい。交通の課題は、組織づくり、誰がどう運営するか、動かすためのお金である。講師を呼んで検討したいこともある。移住者も増えている一方で、住む場所が不足しているなど受け皿も含めて対策が必要なのではないか。
委員長	➢ 専門部会に入っていない方からも意見を頂きたい。
委員	➢ 帰村をして 3 年目、初めて全体的なものを作るということで、様々な課題が出ている。いろいろなものが出てきたので、それぞれ優先順位が異なるのはしょうがないことである。戻ってきたら、これからどうするかということになってきているので、いろいろ出てくるのは当然だろう。その中で何を優先していくか整理が必要。当たり前だが命に関わる部分が大事で、段々に落としていくことが必要。観光で見せるものがないというが、そういう発想ではなく、飯舘村の原点に戻ることが必要。観光という言葉は光を見るという意味である。光が降り注いでそこでどういう産業があって、生活の美しさ、大変さ。本来、飯舘村は助け合いの「までい」でやってきたところがある。大事なことはお金ではない豊かさである。 ➢ 春だけ飯舘に住むなど 2 拠点居住という方法もあるので、移住定住にこだわる必要もないという新しい見方をすれば飯舘村の魅力が出てくるのではないか。 ➢ 小さくても輝く村でもいいが、ふわっとしてる。言葉を落とし、哲学で考えれば心の豊かさが出てくると思う。
委員	➢ 専門性はないが保護者として、村民として、アンケート意見を見ると幅が広いなと思う。どう解決するかという議論がされているが、重要度も進め方などもなかなか難しい。戻る予定がない人が 7 割いることは分かったが、新しく住みたい方の話で、住宅がないという話もあった。飯舘に住んでみたいと思っている人がいれば、なぜ住みたいのか、そこに飯舘のよさがあると思う。これから先どうしていくか、見ていくかが必要。人がいなくなっていってもそれにあった地域がある

	と思う。完全に自給自足を除けば、仕事があって住むところがあればいい。便利なところがあればそこに行ってしまうが、そこに行けない人は別のところを探す。住むところに困っている人を受入れる場所をどう作るか。
委員長	➢ 移住してきた人の声を聞けば、よいところが分かると思う。
委員	➢ アメリカから飯舘村にきている人がいるようだ。ロスから来た人は四季の変化があるのがいいということを聞いたことがある。また、冬の寒さが厳しいことがいいと言っていた。
委員	➢ 住んでみて、星がきれいだなという印象がある。星が手で掴めそうな清々しさを感じた。飯舘は靄がかかっている山だよと言われていたが、田んぼに靄がかかっている景色が見られるなど貴重な体験ができる村で、虫や花々が見られるのもいい。四季を通じて草花が見られるところもよい。
委員長	➢ 声を拾い上げるという意味で多数ではなくても的を射るような意見もでてくると思う。星を使ってということも一つの手段だ。
委員	➢ 四季は風土だと思っている。先生方から子供にしっかり今の話をしてもらいたいと思う。靄もどこでも見られる訳ではない。温度変化がないと靄は出ないがそれを教える機会がない。教育委員会と連携してほしい。
委員	➢ 昔は外に蛍がいっぱいいたと聞いたことがある。今はあまり見ることが出来なくなってしまった。田んぼを再開しないと蛍も戻らないという話もある。
委員	➢ 農業再開というと経済的な話になるが、蛍の視点でいうと新鮮な感じがある。
委員長	➢ 田んぼだけではなく、ビオトープを作るなど学校教育や村民自身で作るというのもよい。部会もまだ２回開催されただけなので、夢物語、現実的なもの、発想や価値感を変えてみるなど違うアプローチもあるかもしれない。
委員	➢ 二地域居住というポイントがある。冬は２ヶ月違うところに住むというライフスタイルの移住者もいるが、それもありだと思う。避難中の方も、二地域居住のような方もいる。地域に縛られないというメリットもある。 ➢ 飯舘村を出ると他と違うところも見えてくる。経験したことを子供たちにも伝えたいと思う。それがポイントになる。
委員	➢ 星がきれいというのは周りから言われないと分からないもの

	だった。山のきれいさ、紅葉などは残して欲しい。そのためには整備が必要になってくる。店がないのは大きな問題だが、自然を大切にすることを盛り込んでいく方がこの計画に合っているのではと考えが変わってきている。
委員	➢ 3.11 の際、赤ちゃんにミルクを飲ませるのに水が不足して困ったところがある。例えば、田舎の山水が出るところにいれば、災害時でもしのげる、そうなると都会とどちらが豊かなのか。商売をするための都市づくりは都心で必要だが、飯舘村は商売のための村づくりではないはず。それぞれ考え方は違うが、ただ「収入・便利さ」だけで計画を考えてしまいがちになる。人間が生きることはどういうことかを考えると、地域で誇り高く生きるのもよいと思った。
委員	➢ 部会はまだ２回しか開催されておらず課題出しと共通認識程度である。まとめ方はこれから考える必要がある。部会で共有したこととアンケート意見のギャップを埋めることが必要と考える。
委員長	➢ 関係人口、来てもらう人だけではなく村外にいてもいつでもコミュニケーションがとれるということも考えていく。 ➢ 改めてここでしかできないことは何なのかを考える必要がある。良さをどう広げていくか。村民の行動計画という言葉が出た。医療面では、あづま脳神経外科病院がどういうことができるかということも考えなければならない。老人クラブや食生活改善員の役割も重要である。
委員	➢ 農業に従事したい人が多いという結果が出ている。15 年前くらいにスマホがこれだけ普及すると誰が予想したか。AI で４割の人の仕事がなくなると言われている。弁護士や建築設計の仕事も AI によりなくなる可能性もある。そう考えた時に農業は AI だけでやれるのか、そういうところはなくならないと思う。むしろ農業は、AI を活用しながら新しい農業のあり方を考えると魅力がでてくる職業なのではないか。昔ほどは稼げないかもしれないが、500 万円くらいなら稼ぐことが出来る。時代を読みながら新しいものを取り入れた村のあり方を考えてもよい。
委員長	➢ 時代を読み解きながら考える必要がある。農業を産業としてだけではなく、生活のための糧として捉え、商業のためではない村づくりを考えるべき。庭先で作った余ったものを活用するなど湯川村などでも行っている。いずれは大きなマーケ

	ットになっていくことも考えられる。農業を楽しみたいという人もいる。
委員	➢ 農業の人は気候のことなど自然を読む力があり、生き方が崇高になっていく。農業以外の職業はパーツに分かれて、自分以外のことはお金で解決していくということをしており、災害が発生した時には何も出来なくなる。農業の人は自然を読めるので力強く生きていける。都会の人は便利すぎてわからない。
委員長	➢ 小さくても輝く自治体の話だが、もっとキーワードを拾い上げてくると、また別のものが出てくるかもしれない。誰が主人公で目標なのかを考えることもあっていい。「小さくても輝く自治体」は行政の目標であり、奥ゆかしい感じもするのでもっと積極的でも良いのでは。大層なことは出来なくても、いい価値を、持っているものを探していったらいいのでは。裏側には問題点もあるとは思うが。誰がどういう風にしていく村なのか、主役が見えるフレーズがいいかと思う。
委員	➢ 地域別懇談会は、これまでの検討内容の問題点を挙げてもらう会ということでいいか。
事務局	➢ 具体的な内容は定めていないので、これまでの検討内容の説明をして、それを元に話し合いをする。
委員	➢ 資料の「対応の方向性」は実施するようにとらえられるのではないか。
事務局	➢ 対応の方向性という言い方は誤解を受けるかもしれないので、表現を工夫する。何を話しても良い会にする予定である。
委員長	➢ 行政にしてもらうことだけではなく、村の人も含めて村づくりをすることを示していく必要がある。村民が村民がと強く言うと荷が重いが、総合計画に沿った村づくりは行政だけでやるものでもない。行政はこれを、村民はこれをということでよいのではないか。
委員	➢ やれる人はやっているし、サポートして欲しい、邪魔しないで欲しい、という声もあるだろう。
委員長	➢ 意見を吸い上げながら、策定委員会でまとめていくようになると思う。懇談会については、要望会という形だけではなく、一緒に考えましょう、意見を出してくださいが必要。その中には要望もあるだろう、主張もあるだろうということで意見を交わして、村をどうしていくかを決めるのが目的。懇談会

	の趣旨を予め伝えた方がよい。
事務局	➢ 議会のように質問があって回答ということではなく、フリーで実施したい。
委員	➢ 地域別懇談会は、今後も開催するのか。
事務局	➢ 概ね計画がまとまった段階で村民向けに 6 次総の内容を説明する機会を設けたいと思う。今のところ日程は決めていないが、計画がある程度固まった後に実施する方向でいる。来年度になるが、いずれ開催したいと思っている。
委員	➢ 飯樋地域の地域別懇談会の 11/21 はまもなくだが、案内はしているのか、ここだけ木曜日なのはなぜか。
事務局	➢ 11/21 の案内は 11/5 にお知らせ版で行っている。日程は区長さんとの話し合いや施設の空き状況等を考慮して決めている。
委員	➢ アンケートでは帰村しないが 7 割、10 代が 9 割である。しかし、一番帰ってくる可能性の高い年代は実は 10 代なのではないのか。
事務局	➢ ４年前のアンケートでは、帰るが 3 割、帰らないが 3 割、迷っているが 3 割くらいであった。計画策定する上では、二地域居住などの交流人口が重要となってくる。
委員	➢ 10 代はこの先考え方を変える可能性がある。それよりも、帰ってきた高齢者の方などへの支援を手厚くしてもいいのではないか。
委員長	➢ 帰ってきていない人のうち 7 割ということだから、それほど数字としては変わっていないのかもしれない。時間の経過とともにこういう結果になったと言うことだと思う。 ➢ アンケートの声だけではなくて、村の将来像ということで、10 年後の人口構成の予測を持って、何も手を打たなければこうなりますよという説明が必要。工夫があることによって、成り行きでない社会に変わる可能性がある。こういうところは少し想定してもいい。
事務局	➢ 現在の村内居住人数である約 1,300 人を基に人口推計を行っており、その推計では、2025 年には 1,000 人くらいになる。その後も、5 年ごとに 130 人くらい移住を呼び込めば、1,000 人を維持できる水準になるという推計が出ている。 ➢ 今のアンケート結果の帰村希望者を含めて 10 年後はどれくらいいるかという話は想定してもよいと思う。

委員	➢ 人口が 1,000 人くらいで比較的成功している村に視察に行くというのも価値があると思う。人口が 1,000 人になると組織力が弱くなってくる。そのため、今のうちにリーダーが育っていく施策、生涯学習、外部との交流などが大事になってくる。三島の視察もいいが、目的をはっきりさせ、必要なところに遠くても良いから代表者だけでも行かせることも大事。
事務局	➢ 今回は全体として三島町に行くが、各部会で目的を持った研修も予定していきたい。
委員	➢ 400 人くらいの村でふるさと協力隊が議員になったという高知県大川村の事例もある。
事務局	➢ 今後も研修の話を出していきたい。
委員	➢ 予めふさわしい候補地を出し、選んでもらう形が望ましい。
事務局	➢ ゲストではなく、自分たちが聞きに行くのでもいいのではないかという話も出ている。
委員長	➢ 部会ごとに焦点は異なる。飯舘村は決して、1300 人だけの計画ではないので、全国に例がない計画の項目も考えなければと思う。二地域居住の人もいるが、現実に住んでいる人で考える必要はどうしても出てくるので視察も必要である。 ➢ 今後のシミュレーションを行い、それを示すと議論も具体になるのではないか。
委員	➢ 基本は人づくりだと思う。村の若い人など将来担う人をきちんと育てることが大事である。
委員	➢ 飯舘村のよさは、山菜など四季の物が食べられたり、親の代が農業をやっていることで自分の家で消費するという環境である。震災があり、全村避難となったので、若い世代は農業にタッチしていない。農業がありそれを自分で消費したという経験のない若い人の結果が出ているアンケート結果だと思った。ただ、60 歳以上が 6 割ということを考えると、震災前からの飯舘村のよさを知っているからこそ、アンケートにしっかり回答してきていると思う。医療の充実が一番となっていたが、震災前からそれほど状況が変わっているわけではない。一度避難し村外の環境に触れたからこそ、医療の充実が出てきたのでは。ドクターヘリを村で所有するなども考えられる。 ➢ 村の範囲は広いが 5,000 人がいたからこそ行政区が維持出来ていた。現在は行政区ごとで人数の差がある。高齢者を訪問

	すると、人と話をしたいという気持ちを感じる。以前は、ちょっと行けば近所でおしゃべりが出来るなどコミュニティのつながりがあった。人と人のつながりがあったから、飯舘村があった。 ➢ 放射性物質などは、事故があったからこそ数値化して目に見えてきたのではないか。 ➢ 農業をやりたい高齢者は多いと思うが、今は足がなくできなくなってしまった人もいる。アンケートにスモールビレッジとあったが、農業をしたくてもできないという声が多いのであれば、農地を集約してバスで農業にいき、バスで買い物に行くのもありかと思った。
委員長	➢ 高齢の方々が人恋しく思っているという話を他でも聞いていて、健康部会で議論にもなっている。それを役場でやるという話にはならず、仕組みづくりはするかもしれないけど、担い手は村民。これまでは近所の玄関先で話ができたが、今は隣の隣の行政区に出かけていかなければならない時もある。足腰が弱くなり行けないケースもある。
事務局	➢ 村民向けの中間報告会と、１月２４日に策定委員会・専門部会を合同で開催することについては問題ないか。
委員長	➢ 特に意見がないようなので、中間報告会と１月２４日の件は提案どおり進めることにする。
４．その他	
	・なし
５．次回の予定	
	・次回は１月 24 日に開催する。
６．閉会	
	・事務局（松下）より閉会のあいさつを行った。

第２回　飯舘村第６次総合振興計画策定委員会
次　　　第

日時：令和元年 11 月 15 日（金）18:30～

場所：飯舘村役場第一会議室

１　開　会

２　計画策定の進捗報告等

１）地域別懇談会の開催予定

２）専門部会合同視察研修の実施予定

３）アンケート集計の速報

４）専門部会での検討内容（第１回・第２回）

３　議　　事

１）アンケート及び専門部会の報告について

２）村民向けの中間報告会の開催について

３）策定委員会・専門部会の合同開催について

４　その他

５　次回の予定

６　閉　会

１）地域別懇談会の開催予定

１．概要

◆目的

　飯舘村第 6 次総合計画策定にむけ、下記の地区ごとに住民懇談会を行い、専門部会で具体的取り組みを検討するための資料とする。

◆周知方法

　広報誌で全戸にお知らせを行う。なお、各行政区長には参加依頼済み。

◆内容

　策定委員会や専門部会の検討内容、アンケート結果などを踏まえ、村長と懇談形式で実施する。なお、副村長・教育長・各課長等・コミュニティ担当者も参加可能な日程には出席予定。

２．開催スケジュール（案）

日時	地区名	会場
2019 年 11 月 21 日（木）13：30～	飯樋町・前田八和木・大久保外内・上飯樋	飯樋町集会所
2019 年 12 月 14 日（土）10：00～	草野・深谷・伊丹沢・関沢・小宮・宮内	交流センター
2019 年 12 月 14 日（土）13：30～	比曽・長泥・蕨平	交流センター
2019 年 12 月 21 日（土）10：00～	八木沢芦原・佐須・大倉	交流センター
2019 年 12 月 21 日（土）13：30～	関根松塚・臼石・前田・二枚橋須萱	交流センター

２）三島町視察研修

１．概要

　地域づくりの先進事例から、村での取組みにつなげるため、専門部会合同で三島町での視察研修を１２月１日（日）～２日（月）に実施する。

２．研修スケジュール（案）

時間	行程	備考
１２月１日（日）＜１日目＞		
8：00	飯舘村役場出発（公用バス）	
9：00	福島駅到着、休憩	
9：15	福島駅出発	
10：25	磐梯山サービスエリアで休憩	
10：40	磐梯山サービスエリア出発	
11：40	三島町役場到着	
12：00	昼食（部会別に日程や着目したい点を話し合いながら）	
13：00	視察（三島町役場の公用車が先導）	
	①三島町長講話	
	②三島町の概要・移住体験住宅（移住定住施策・空き家対策等について）	
	③三島町観光協会（レンタサイクル・田舎暮らし体験ツアー等）	
	④三島町生活工芸館、工人の館、三島町交流センター山びこ館内視察	
	⑤森の校舎カタクリ施設見学・宿泊	
17：00	１日目研修終了	
18：00	懇親会	
１２月２日（月）＜２日目＞		
7：00	朝食	
8：00	森の校舎カタクリをチェックアウト	
9：00	視察（三島町役場の公用車が先導）	
	①町政・デマンドバスについて等	
	②特別養護老人ホーム（ショートステイの状況等）	
	③教育・文化関係全般	
12：00	道の駅みしまで昼食、休憩、ビューポイント見学	
13：00	道の駅みしまを出発	
14：00	磐梯山サービスエリアで休憩	
14：15	磐梯山サービスエリアを出発	
15：25	福島駅到着、休憩	
15：40	福島駅出発	
16：40	飯舘村役場到着	

３）村民アンケート結果（速報版）

令和元年９月から実施している「村民アンケート」について、現時点で入力が完了した 425 世帯・797 票の集計結果を速報版としてご報告します。

当初、アンケートの回答期限は 10 月 21 日と設定していましたが、村民の貴重なご意見を少しでも計画に反映するため、協力依頼や回収を進めております。11 月 30 日までに回収された調査票を最終版としてとりまとめていきます。

１．アンケート票の設問概要と回収状況

（１）アンケート票の設問概要

〇回答者の属性
　性別・年代・お住まい等
〇帰村の予定　※避難中の方のみ
〇新しい村づくりに関する重要な項目について
　25 項目から重要度について選択
〇村の賑わいの回復や経済活性化等に関連して、新しく始めたいと考えていること
　14 項目について選択および記述

（２）回収状況

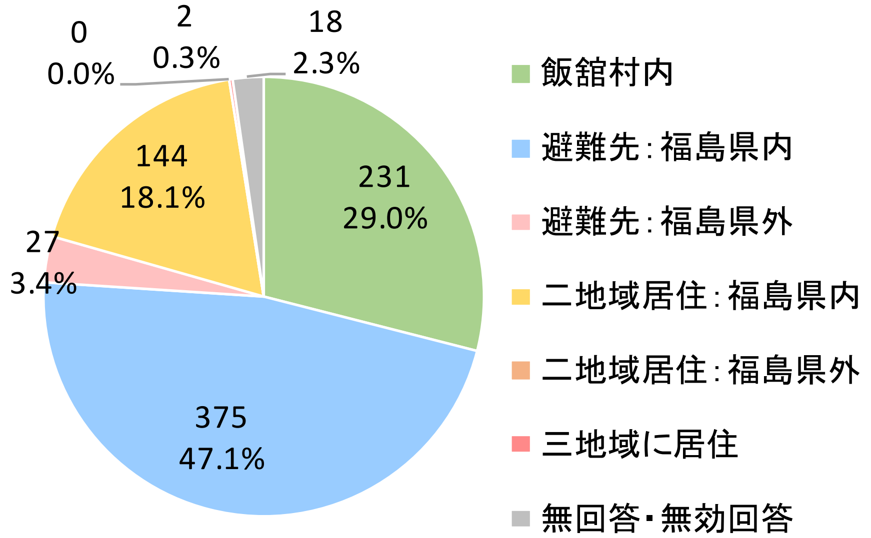
〇10 月 31 日時点の回収率は世帯が 21.8%、個人が 18.8%です。
〇今回は 480 世帯・912 票のうち、425 世帯・797 票の集計結果についてとりまとめたものを報告致します。

	世帯	個人
ア：配布数	２，２０２	４，８５０
イ：回収数	４８０	９１２
ウ：回収率（イ/ウ）	２１．８%	１８．８%

２．回答者の属性

（１）居住地

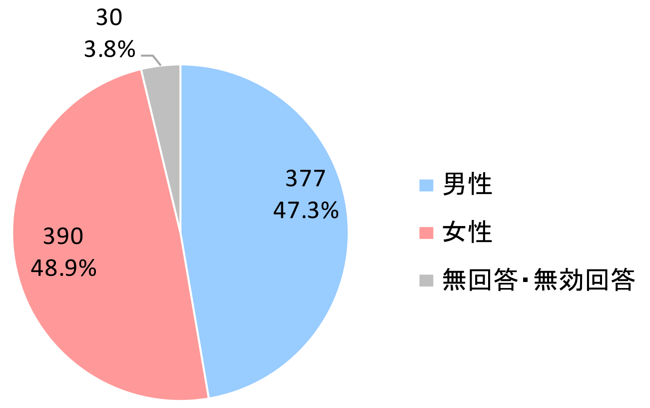
〇「県内の避難先」に居住する方が最も多く 375 票（47.1%）、次いで「村内」に居住する方が 231 票（29.0%）、「村と県内の避難先の二地域」に居住する方が 144 票（18.1%）となっています。



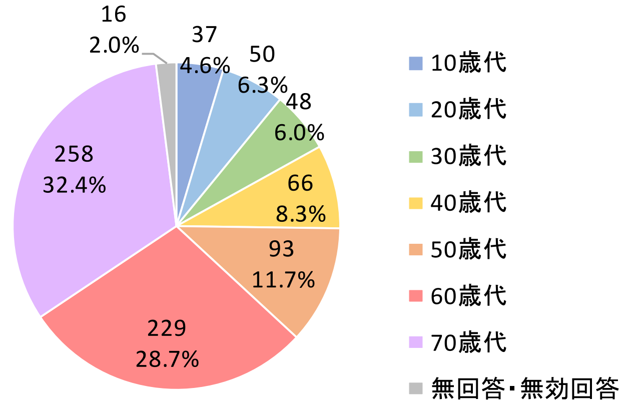
（n=797）

（２）性別と年齢

〇男性・女性それぞれ半数ずつの回答となっています。
〇回答者のうち、約６割が 60 歳以上となっています。



（n=797）

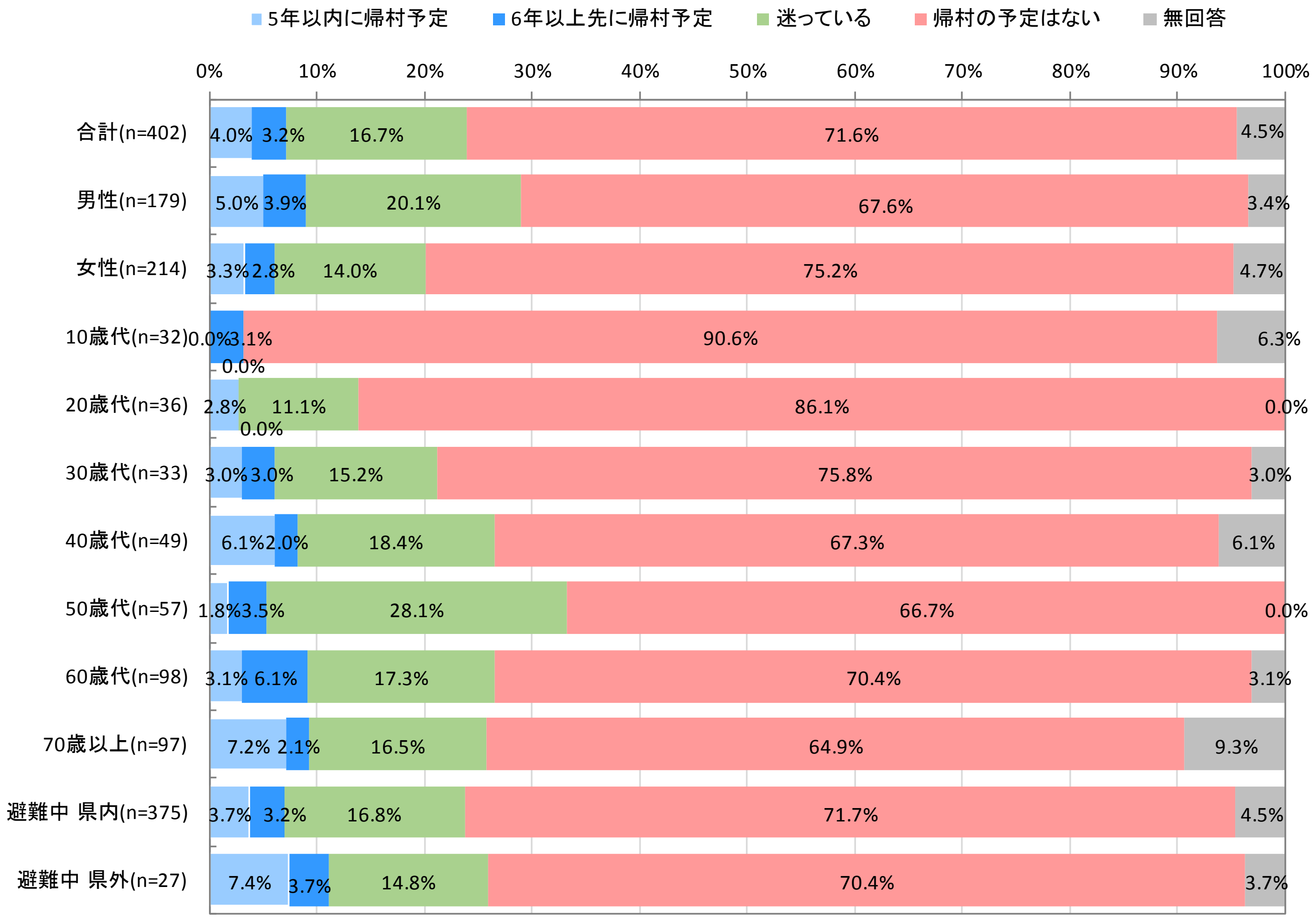


（n=797）

2．帰村予定（避難先にお住まいの方 402 名の回答）

（1）帰村の意向

〇避難者のうち、約７割が「帰村の予定はない」と回答しています。
〇「女性」よりも「男性」の方が帰村意向は強い傾向にあります。
〇年代別に見ると、「40 歳代」「50 歳代」で帰村に迷っている割合が高くなっています。
〇「５年以内に帰村予定の方」の中には、「家族」の卒業などの転機等のタイミングで戻ることを考えているとの意見も見られます。
〇「迷っている方」の中には、「放射能」に対する不安の他、コミュニティや働く場、買い物、医療など、日常生活に不安を感じているとの意見も見られます。



（2）帰村予定に関する主な意見

① ５年以内に帰村予定の方

〇子や孫の学校が終わるから。
〇ふるさとにもどりたいから。
〇トンパックが無くなればすぐに帰りたい。
〇お金もないし帰るしかない。
〇村内にある農地を管理するため（営農再開のため）。

② ６年以上先に帰村予定の方

〇小さい子供は、飯舘で遊ばせたくない。
〇国の復興支援事業で避難先での営農を継続しなければならないから。
〇放射能が高いので低くなってから帰村したい。
〇村に土地や家屋があるため。
〇定年後。

③ 迷っている方

〇風評被害・放射能の不安・農業の後継者
〇コミュニティが少なすぎる。
〇働く場所がない。
〇自動車免許返納すれば、食料品の買い出しや医療機関にも行く事が出来なくなる。周りの家にはだれもいない。携帯電話がつながらないラジオの電波もない。
〇将来的に施設の維持・管理に不安。
〇一人では帰って生活ができない為（病院・買い物が近くにない為）。
〇飯舘にも農地、建物、墓があるから。
〇村の５年間中の進展を見ます。
〇住宅再建が困難。

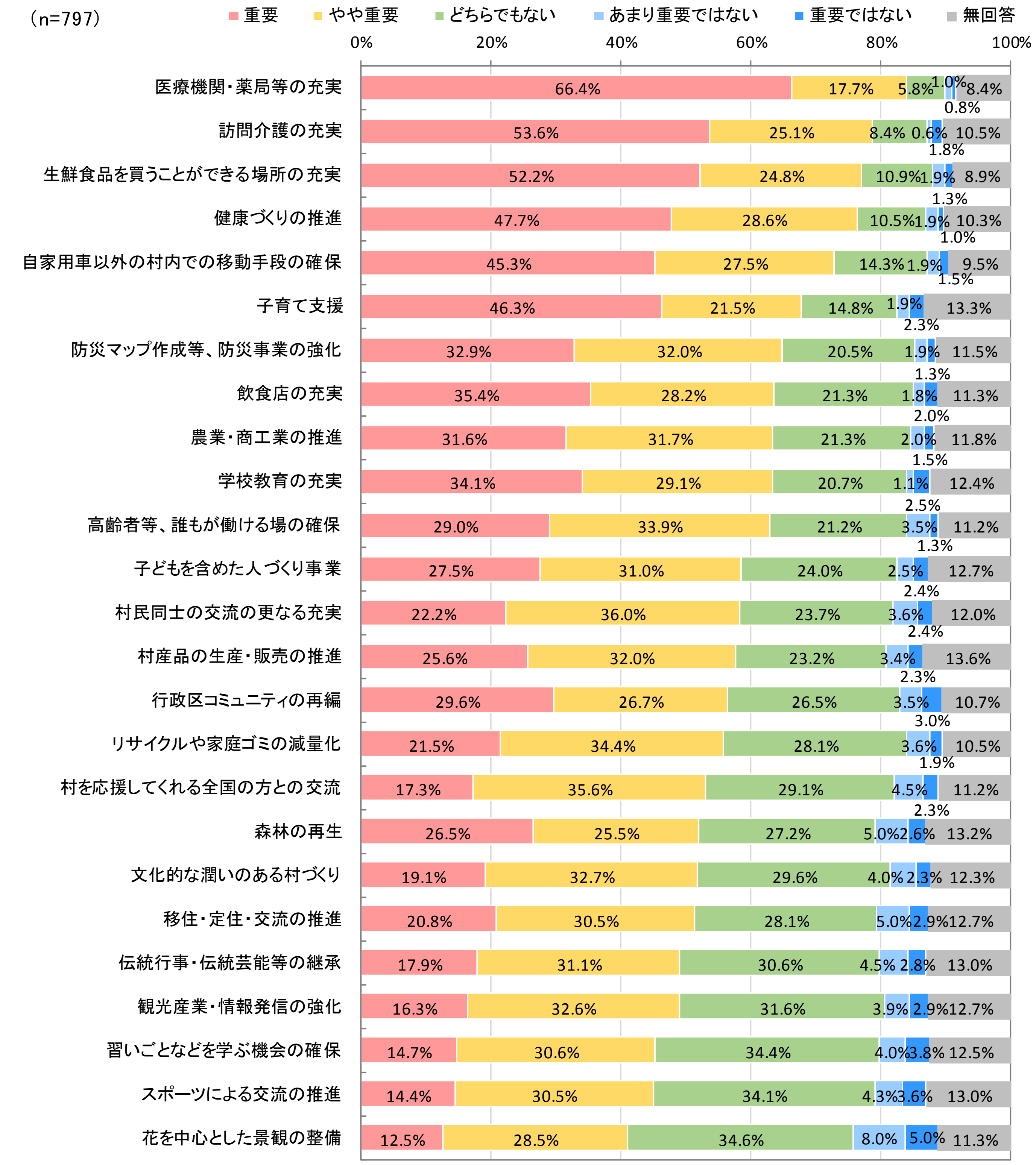
④ 帰村の予定はない方

〇飯舘に戻ってもやる事がない。
〇安全に住めないし、安心して泊まれない。野菜も安心して食べられない。
〇生活基盤が出来たため。生活、仕事が定着した。
〇避難先の方が日常生活における利便性が良いから。
〇高齢者のため医療インフラが整っている所がどうしても大事になる。
〇家がもう村内にない。
〇避難先にて自宅購入。
〇田畑が出来ない。廃炉作業事故の可能性あり。放射能の影響を受けたくない。

3．新しい村づくりについて

〇半数以上の方が「医療機関・薬局等」や「訪問介護」、「生鮮食品を買うことができる場所」の充実を「重要」と選択しています。
〇「文化」や「行事」「交流」「観光産業」「習いごと」「スポーツ」などの機会や交流よりも、医療や買い物などの「暮らし」や「健康」「子育て」など日常生活に直接関わる項目の重要度が高くなっています。

（1）項目別の重要度比較



（2）年代別・居住地別の重要度（「重要」と「やや重要」の合計）

【世代別の視点】
〇「10 代」は「子育て支援」や「飲食店の充実」も重要度が高い状況です。また「伝統行事・伝統芸能等の継承」の重要度がどの年代よりも高くなっています。
〇「20～30 代」は「子育て支援」の重要度もお高い傾向にあります。
〇「40 代」は「自家用車以外の移動手段の確保」も高い傾向にあります。
〇「60 代」は「高齢者等、誰もが働ける場の確保」も高い傾向にあります。
〇「70 歳以上」は「村民同士の交流の更なる充実」も高い傾向にあります。
【居住地別の視点】
〇「村内居住者」は２番目に「生鮮食品を買うことができる場所の充実」が高くなっています。
〇「村外居住者」は３番目に「健康づくりの推進」が高くなっています。

	合計(n=797)	10歳代(n=37)	20歳代(n=50)	30歳代(n=48)	40歳代(n=66)	50歳代(n=93)	60歳代(n=229)	70歳以上(n=258)	年代無回答(n=16)	村内(n=231)	村外(n=564)
医療機関・薬局等の充実	**84.1%**	**83.8%**	**78.0%**	**77.1%**	**84.8%**	**88.2%**	**85.6%**	**87.6%**	18.8%	**88.7%**	**80.7%**
訪問介護の充実	**78.7%**	70.3%	**78.0%**	**77.1%**	**81.8%**	**82.8%**	**79.5%**	**81.0%**	18.8%	**81.8%**	**76.1%**
生鮮食品を買うことができる場所の充実	**77.0%**	**75.7%**	76.0%	66.7%	75.8%	**87.1%**	78.2%	**79.1%**	12.5%	**85.7%**	72.2%
健康づくりの推進	76.3%	73.0%	74.0%	64.6%	74.2%	78.5%	**81.7%**	77.9%	18.8%	79.2%	**73.9%**
自家用車以外の村内での移動手段の確保	72.8%	64.9%	72.0%	60.4%	**78.8%**	80.6%	73.4%	75.2%	12.5%	76.6%	70.0%
子育て支援	67.8%	**78.4%**	**76.0%**	**79.2%**	69.7%	71.0%	72.1%	60.5%	12.5%	68.8%	66.1%
防災マップ作成等、防災事業の強化	64.9%	70.3%	62.0%	64.6%	60.6%	71.0%	65.5%	66.3%	12.5%	70.1%	61.9%
飲食店の充実	63.6%	**75.7%**	74.0%	64.6%	62.1%	65.6%	65.9%	60.5%	12.5%	66.7%	61.3%
農業・商工業の推進	63.4%	59.5%	56.0%	66.7%	59.1%	68.8%	69.0%	62.0%	12.5%	68.4%	60.3%
学校教育の充実	63.2%	70.3%	62.0%	70.8%	63.6%	64.5%	69.9%	57.8%	12.5%	68.0%	60.5%
高齢者等、誰もが働ける場の確保	62.9%	59.5%	66.0%	60.4%	59.1%	71.0%	68.1%	59.7%	12.5%	69.3%	59.2%
子どもを含めた人づくり事業	58.5%	51.4%	60.0%	60.4%	53.0%	59.1%	62.0%	59.3%	18.8%	61.9%	56.0%
村民同士の交流の更なる充実	58.2%	59.5%	48.0%	50.0%	47.0%	52.7%	62.4%	65.1%	18.8%	59.3%	56.6%
村産品の生産・販売の推進	57.6%	59.5%	54.0%	58.3%	54.5%	55.9%	65.9%	54.7%	12.5%	63.6%	54.4%
行政区コミュニティの再編	56.3%	51.4%	36.0%	47.9%	40.9%	49.5%	65.5%	63.2%	18.8%	64.1%	52.1%
リサイクルや家庭ゴミの減量化	55.8%	59.5%	48.0%	47.9%	47.0%	51.6%	59.0%	61.6%	18.8%	67.1%	50.4%
村を応援してくれる全国の方との交流	52.9%	51.4%	50.0%	58.3%	50.0%	46.2%	58.5%	53.5%	12.5%	58.9%	49.8%
森林の再生	51.9%	56.8%	46.0%	58.3%	48.5%	51.6%	53.7%	53.1%	12.5%	59.3%	47.9%
文化的な潤いのある村づくり	51.8%	56.8%	44.0%	47.9%	50.0%	45.2%	52.8%	57.4%	18.8%	58.9%	48.0%
移住・定住・交流の推進	51.3%	62.2%	52.0%	56.3%	50.0%	46.2%	55.5%	49.6%	12.5%	56.7%	48.6%
伝統行事・伝統芸能等の継承	49.1%	64.9%	48.0%	52.1%	51.5%	45.2%	49.8%	48.4%	18.8%	50.2%	47.7%
観光産業・情報発信の強化	48.9%	56.8%	44.0%	54.2%	50.0%	53.8%	52.4%	45.0%	12.5%	55.8%	45.6%
習いごとなどを学ぶ機会の確保	45.3%	64.9%	48.0%	50.0%	48.5%	43.0%	47.2%	41.5%	12.5%	46.3%	44.1%
スポーツによる交流の推進	44.9%	62.2%	54.0%	50.0%	45.5%	43.0%	44.1%	43.0%	12.5%	46.8%	43.6%
花を中心とした景観の整備	41.0%	45.9%	36.0%	37.5%	24.2%	40.9%	43.7%	45.3%	18.8%	45.5%	38.5%

4．新しく始めたいと考えていることについて
（1）項目別比較

〇「農業再開」が最も多く回答者数の約５人に１人の 145 人の方が選択しています。
〇その他、「村民同士や村外との交流・協力」、「移住者受け入れ支援」を選択する方が多くなっています。

選択項目	票数	詳細な意見（抜粋）
1.農業再開	145	〇畜産・花・稲作・野菜（ブルベリーやそばも）・キノコ（ハウス） 〇畜産・野菜のブランド化
9.村民同士の交流の場づくり、交流イベント開催や協力	95	〇放射線の正しい知識をお互いに話し合う　〇自治会交流の場への参加など 〇スポーツや農作業を通しての交流　〇集会所を利用してサロンや手芸等で交流 〇行政努力、イベント強化、フェス等の開催
2.新規就農	86	〇畜産・花・稲作・野菜・キノコ（ハウス） 〇バイオエネルギー作物
11.移住者受け入れ支援	69	〇特に農業経営をしたい人を優先し、条件、環境も整えてむかえる 〇居住と仕事の確保　〇売り物件の公開情報の閲覧 〇年配者、子供達の受け入れ体制の確保
10.村外の方との交流の場づくり、交流イベントの開催や協力	62	〇ボランティア活動 〇現在と震災前の復興状況の見学ツアー等 〇復興マラソンをして県外から人を呼ぶ
6.新たな特産品や名物の開発・販売	52	〇ハウス栽培（キウイ、いちぢく） 〇ブルーベリーしそジュース 〇華・栗・ケーキ・くだもの
13.村外への情報発信	47	〇ホームページ　〇観光や農産物の発信 〇飯舘村の安全性を口コミで拡げる。 〇他県に出向いてのアピール
14.村外の企業等との連携	41	〇バイオ系、機械系技術の企業・大学→イノベーション 〇外国のアンテナショップ誘致による大企業の参加
3.村内での就職	36	〇農業と林業　〇AI的な農業 〇老人ホーム
5.自宅等で店を始める	35	〇民泊　〇飲食店（カフェ等） 〇エステ・理容・美容
7.工芸品等の制作や販売	34	〇村内の工作企業（キクチとかハヤシなど）村産の食品以外の製品を作る 〇木工品の作成・ちいさなもの 〇編み物・手細工
8.飯舘村のふるさと納税返礼品への出品	28	〇裁縫科で作成したもの、村の花、村民がかかわってるもの利用 〇米、きのこ、まつたけ、人気のあった飯舘牛の復活をする
4.会社等の起業	26	〇鉄工業・建設業・土木　〇農業関連・営農団体　〇販売業　〇通信関係 〇福祉就労所　〇ベーカリー　〇介護士　〇コンビニ 〇広域地方創生の推進
12.海外との交流事業	19	〇外国人の受け入れ　〇福島の現状視察等 〇外国のアンテナショップの誘致により観光地化
15.その他	38	〇山林の利用、手入れ、立木落葉樹の利用　〇スポーツ庁とかとの話し合い 〇放射線の学習会　〇村の歴史を忘れてはならない 〇映画村でもつくってはどうか

（2）年代別・居住地別の新しく始めたいと考えていること

【年代別】
〇「20 歳代」以外の年代では「農業再開」を選択した方が最も多くなっています。「20 歳代」は、「自宅等で店を始める」「会社等の起業」などの意向が高い傾向です。
〇「10～20 歳代」は「30 歳代以上」では低くなっている「海外との交流事業」を多く選択しています。
〇「10～40 歳代」は「50 歳代以上」に比べ、起業や店を始めるといった「自立志向」が高い傾向にあります。
〇「60 歳以上」は「新規就農」「交流」「移住者受け入れ」を選択する方が多い傾向です。
【居住地別】
〇居住地に拘わらず「農業再開」の意向が高い傾向にあります。
〇「村外居住者」の方は「村内居住者」よりも「村外の方との交流の場づくり、交流イベントの開催や協力」を新しく始めたいとの意向が高くなっています。

	合計 (n=797)	10歳代 (n=37)	20歳代 (n=50)	30歳代 (n=48)	40歳代 (n=66)	50歳代 (n=93)	60歳代 (n=229)	70歳以上 (n=258)	不明・無回答 (n=16)	村内居住者 (n=231)	村外居住者 (n=564)
1.農業再開	18.2%	16.2%	4.0%	12.5%	9.1%	19.4%	22.3%	21.7%		19.5%	17.2%
9.村民同士の交流の場づくり、交流イベント開催や協力	11.9%	5.4%	2.0%	8.3%	6.1%	7.5%	14.4%	17.1%		14.3%	10.5%
2.新規就農	10.8%	10.8%	2.0%	2.1%	7.6%	12.9%	12.7%	13.2%		12.6%	9.8%
11.移住者受け入れ支援	8.7%	2.7%	4.0%	6.3%	3.0%	3.2%	10.5%	13.2%		12.1%	6.9%
10.村外の方との交流の場づくり、交流イベントの開催や協力	7.8%	5.4%	2.0%	8.3%	6.1%	4.3%	7.4%	11.6%		7.4%	7.6%
6.新たな特産品や名物の開発・販売	6.5%	2.7%	2.0%		1.5%	2.2%	8.7%	10.5%		8.7%	5.1%
13.村外への情報発信	5.9%	2.7%	2.0%	8.3%	3.0%	2.2%	7.0%	8.1%		6.9%	5.0%
14.村外の企業等との連携	5.1%	2.7%	4.0%	6.3%	4.5%	1.1%	5.7%	7.0%		6.5%	4.3%
3.村内での就職	4.5%	5.4%		6.3%	4.5%		7.4%	4.3%		6.1%	3.7%
5.自宅等で店を始める	4.4%	5.4%	6.0%	6.3%	7.6%	4.3%	3.1%	4.3%		3.9%	4.6%
7.工芸品等の制作や販売	4.3%	2.7%			3.0%	1.1%	4.8%	7.4%		6.5%	3.2%
8.飯舘村のふるさと納税返礼品への出品	3.5%	5.4%		2.1%			3.5%	6.6%		4.3%	3.0%
4.会社等の起業	3.3%	5.4%	6.0%	6.3%	3.0%	2.2%	3.1%	2.7%		4.3%	2.5%
12.海外との交流事業	2.4%	8.1%	6.0%	2.1%	1.5%	1.1%	2.2%	1.9%		1.7%	2.5%
15.その他	4.8%	2.7%	2.0%		3.0%	2.2%	7.4%	5.8%		5.2%	4.6%

４）専門部会での検討内容

～　第１回・第２回専門部会　～

１．専門部会の概要

第１回では、４部門合同で開催し､現状の問題点をフセンに書き出して抽出しました。第２回では、第５次総合振興計画や復興計画の重要な取組みについて点検を行った後、第１回で出された「現状の問題点」の深掘りおよび新たな視点を加えた問題点の意見交換を行いました。部会ごとの詳細は次項以降に示します。

■専門部会の全体スケジュール

開催月	会議のテーマ
第１回（2019 年９月）開催済	○現状の問題点について意見交換
第２回（2019 年 10 月）開催済	○問題点の深掘り ○ゲストメンバーの検討
第３回（2019 年 11 月）予定	○アンケート結果（速報版）の報告 ○問題解決の方向性の整理
第４回（2019 年 12 月）予定	○具体的な取組みの検討
第５回（2020 年１月）予定 【策定委員会と同時開催】	○中間発表会 ・方向性の確認 ・横断的な取組みについて意見交換
第６回（2020 年２月）予定	○横断的な取組みの整理
第７回（2020 年３月）予定	○施策の役割分担の設定 ○目標・取組み機関の目安の設定
第８回（2020 年４月）予定	○施策の最終決定に向けた意見交換
第９回（2020 年５月）予定	○計画書案を基にした意見交換

２．開催日

部会名	第１回	第２回
（１）健康・福祉・環境部会	2019 年９月 30 日 18：30～20：30	2019 年 10 月 23 日 18：30～20：30
（２）産業・観光・移住部会		2019 年 10 月 18 日 18：30～20：30
（３）教育・文化部会		2019 年 10 月 29 日 18：30～20：30
（４）防災・建設・行財政部会		2019 年 10 月 28 日 15：30～17：30

第１回専門部会

第２回専門部会

３． 専門部会での検討内容

（１）健康・福祉・環境部会			
視点	**問題点**	**今後の展望**	**共有されたこと**
健康			
１）健康	○メタボ・高血圧が多い ○健康寿命向上 ○体調を崩す原因は放射能ばかりではなく、ストレス ○糖尿病（予備軍）減少させたい ○発達障害の子どものケア	○子ども達の健康管理（乳幼児から中学生までの肥満教室） ○健診受診率が低いため、健康まつりを復活 ○ダイエットのため気軽に運動できる場所・機会の創出 ○いいたて健康食品の開発（６次化） ○健康食料理講座（教室）マスター	○健康寿命を向上させていくために、子ども達の健康管理や個別のカルテなどきめ細やかな対応が課題
2）医療	○医療機関・薬局の営業日増加 ○医療費が高く、保険料（国保）も高くなる ○人づくり		○医療人材を確保し、医療サービスを充実させていくことが課題
3）スローフード	○安全な食料の確保 ○郷土食と健康食の両立 ○郷土食のレシピを高齢者から聞き取ることをしたが、最終的に人手が不足した	○郷土食と子育て支援を組み合わせる ○ごんぼっぱなどの郷土食・行事食の継承・復活 ○安全なきのこが取れる場所の確保 ○新しいレシピ（いいたてらしさ）を作って提供・いいたてクックパット ○郷土食のコンテストをしてレシピをおこす ○土室・雪室などの保存方法の継承	○郷土食は子育て支援にもなるため、**高齢者からの聞き取りやコンテストによるレシピの継承・復活**の必要性
4）交流	○村外に住まわれている方（復興公営等）との交流はあるか ○多世代が楽しめる活動が必要 ○スーパーやコメリは買い物だけではなく交流の場だった ○高齢者が寂しがっている	○移動食堂・キッチンカー・コミュニティ食堂 ○移動居酒屋・赤ちょうちんサロン ○ホラふき大会復活 ○いいたて応援ボランティアの育成 ○村外サポーター（ボランティア）も呼び込み暮らしの活動 ○親子で料理教室や学校内での郷土料理教室やりたい ○相談できる場所づくり ○イタリアではキッチンカーを自治体が所有して被災時にも使う	○全体として交流の場が少なく、多世代・村内外を含めた交流の場や機会の創出が課題 ○**キッチンカーを導入**し、昼間は地域をめぐって**コミュニティ食堂**、夜は孤独になりがちな男性の**赤ちょうちんサロン**という手法はどうか ○**ホラふき大会**も今なら復活できるかもしれない
5）移動	○高齢者の移動手段が少ない ○村外への移動手段が少ない（買い物・病院）	○村民の移動ニーズをしっかりと把握する	○村民の移動手段は、**どんな交通がどの程度の価格で必要なのかニーズを把握する**

視点	問題点	今後の展望	共有されたこと
6）暮らし	○住宅内なのに携帯電話圏外 ○買い物する場所の不足 ○避難前は戸締りしなくても安全だった		○暮らす上での最低限の生活利便性や安全・安心の確保が課題
福祉			
7）介護サービス	○専門職員（保健師等）の不足 ○高齢者割合（帰村者）が高く、老老介護になる ○村外の事業所のどこにも受け入れてもらえない地区がある ○長時間移動	○在宅サービス（訪問介護等）の早期再開 ○行政区毎の地区活動（サロン）は、継続（or 再開）	○帰村者は高齢者の割合が高く、村内の介護サービスや職員が不足している現状を踏まえ、**介護サービス人員の不足等をどう解決していくかが課題**
8）子育て支援	○親子で集まる場がほしい ○学校以外の子どものあそび場 ○子ども達の通学や待ち時間・乗っている時間の工夫が必要（スクールバス） ○村内に住む子育てする方が集まる場所がない（子ども園には入っていないお子さんなど）	○村外・村内での子育てサークル・母親教室・子育てサロン ○学校を楽しいところにする（遊び・イベント・キャンプ） ○村独自での就学支援・援助、学習支援 ○冒険遊び場（プレイパーク） ○高齢者を子育てサポーターとして活躍してもらう	○多世代での多様な交流促進や就学支援等の必要性
環境			
9）環境	○空き家 ○県道沿いなど花をもっと景観に活かす ○緑が豊かで自然が多い ○除草	○星空の下でワインをたのしむ夕べの開催 ○古民家・空家・小学校跡で星を見る会	○通行量の多い県道周辺の環境を整えること、星空を楽しめるイベントなどの必要性
10）ごみ処理・資源循環	○循環型をしたいが、イノシシ対策が必要 ○大型ゴミの搬出 ○ゴミ袋の値段が安いと良い ○高齢者のゴミ出しは遠くて苦労 ○レジ袋削減		○ごみを削減したいが、震災前とは異なる状況もありなかなか進まない現状
11）ペット	○放し飼いの犬が危ない ○交通量が多くペットが事故に遭う	○やぎの草刈り ○サファリパークとしては	○震災前とは異なる状況がある
12）村内のバリアフリー	○昇口が長い	○面白い看板など村内の道路がもっと楽しくわかるもの ○住民票がどこになっても「飯舘村民」という意識 ○自分史のように、人生を記録する・伝える	○**住民票がどこになっても「飯舘村民」という意識**を持つことの必要性

（２）産業・観光・移住部会			
視点	**問題点**	**今後の展望**	**共有されたこと**
産業			
１）農業・商業・工業の活性化	○農家は人手不足（働きたい人の求人をどうするか） ○水路の管理に１～２人では難しい ○農業が続かない ○産業が続かない ○資金やノウハウの不足	○新規事業先への支援 ○臼石小の活用（チャレンジショップ・企業） ○石材の活用	○農業の再開に向けていかに**「人材」を確保していくかが課題**
２）雇用	○働く場所がない ○村で働きたいと思わない（働く意欲がでない） ○期間限定で人手がほしい	○道の駅に行政区ごとに出店してもらう ○フレキシブル人材派遣（半農半Ｘ） ○職業体験としてもいい ○ウーバーイーツのような働き方（ショートワークの人材派遣） ○働く人の不足に外国人のための日本語学校	○雇用主は働き手を欲している状況の中、いかに**「雇用主と働き手をマッチング」させていくかが課題** ○外国人や村外の人など**「新しい働き手を増やす仕組み」が必要**
３）食	○飯舘の「食」を楽しめる場がまだ少ない ○お酒を飲む場所（店）がない・夜、食べるところがない ○野生のものが食べられない ○作ったものも不安がある	○「宿泊体験館きこり」の活用	○場所や人材・食材が少ない中、**いかに「食で楽しむ機会・空間」を作るかが課題**
観光			
４）観光	○観光するところが少ない・観光資源がない（あいの沢は荒れている）・観光があってもつまらない ○特産の食べ物がない（飯舘牛に代わる起爆剤がない） ○「宿泊体験館きこり」の知名度が低い ○案内してくれる人が不足している（村民も観光の知識が一般的なものしかない）	○世界的には知名度は抜群。地方に観光にくる外国人は増えている（外国人へのアプローチ） ○廃校を活用⇒校舎を再生し YouTube に UP ○キャンプ場やあいの沢といった資源の活用 ○田舎暮らし希望者に飯舘のよいところを発信する ○ボランティアツアー・メニューづくり （スタディツアーなど）	○観光資源が少ない中、飯舘を選んでもらうにはどうしたらよいかを考え、**既存の資源をいかに「活用して魅力的」にしていくかが課題** ○村の案内人の育成が必要 ○被災地であることを逆手にとり、**いかに「世界に発信」していくかが課題**
５）景観	○田んぼにフレコンバックがありすぎる ○水田以外の風景が思い浮かばない ○猿と猪の被害が結構多い ○太陽光発電の景観はどう考えるのか	○村民みんなで村の歴史の学習会･村の歴史をひもとくことが大切 ○アートによるまちづくり ○自然が感じられる （絶滅危惧種が生息できる・星がきれい） ○新しい景観づくりに向けたルールづくり	○村民みんなで村について学び、**いかに「自然が感じられる村」を守りつつ「新しい景観」を取り入れていくかが課題**

視点	問題点	今後の展望	共有されたこと
6）移動	○村内での移動が大変（タクシー等がない）・村内でタクシー移動ができない ○車のない人の移動手段 ○除雪が心配 ○バスの本数が少ない		○村民や観光客も**車がなくても移動出来る仕組みを構築することが必要**
移住			
7）移住定住	○人手が足りない・若者がいない（会合が集中するなど若者の負担が大きい） ○これまでの飯舘の取り組みをどう継承していくか ○移住環境が整っていない（若い人が移住しない・人が増えない） ○積極的に人が動かない・働かない ○人と人との距離がさらに遠くなっている（物理的にも）	○以前は元気な女性たちが村を動かしていた	○移住者を増やすため、**いかに村民自身が積極的になり、心の距離を縮める行動を行うかが課題**
8）生活利便施設	○店が少ない・営業時間が短い（村内で買い物を終えたい・ホームセンターなど） ○大人だけでなく、小児科も開設してほしい ○薬局がほしい	○道の駅に生活雑貨を（生鮮食品・日用品を取り扱うスーパーマーケットがほしい）	○村民の生活利便性の向上のため、いかに**「既存の施設」へ付加価値を付けていくかが課題**
9）地域コミュニティ	○総合計画での行政区の位置づけ ○地区別計画（ができないのか）	○道の駅等を活用したみんなで集まって話せる場	○行政区のまとまりの維持や活動をしていくために、**みんなで集まりチャレンジ出来る場や機会の創出が必要**
10）関係人口の拡大		○ふるさと住民制度の活性化 ○地域おこし協力隊や集落支援員の活用	○関係人口の拡大へ向け、**「人の魅力」から「共感人口」を増やすことが必要**。さらに関係人口を段階的に定住人口へつなげるため、**人・観光・産業などを網羅したスキーム（枠組み）を構築することが必要**

（3）教育・文化部会			
視点	問題点	今後の展望	共有されたこと
教育―1. 学校教育			
1）学びの特色	○ICT　プログラミング授業の充実 ○小中学生の大学見学及び交流 ○課外授業（野山に学ぶ）の不足 ○海外研修成果の発信の場	○特色ある学びの継続 ○課外授業（野山に学ぶ）の充実	**○充実した教育の成果をいかに外へ発信していくか** ※２）～５）と相関
2）学習と 通学の関係	○登下校の時間が長い（長い場合は 12 時間程度） ○学童の 2/3 はスクールバスで通学している ○バスの運行時間が気候に左右される ○子ども達の家庭での学習時間が減少 ○村塾の希望者は減少	○スクールバスへの GPS 設置による迎え等の時間の確認 ○村塾の充実	**○いかに生徒たちの「放課後の時間」を充実したものとするかが課題**
3）子どもの現状	○0 歳児の保育士がいない※9）と相関 ○児童・生徒の減少 ○幼児は村外からも通ってきているが小学校入学時に減少する ○卒業すると学校へ行く機会がない ○他市町村からの転入が増加した		○そもそもどんな子どもに育ってほしいのかということが共有されているだろうか
4）飯舘らしさ	○ふるさとをふるさととして実感できているのか ○村を知らない村の子ども増加	○ふるさと学の必要性→小中一貫教育によりふるさと学習年間 30 時間を確保	**○飯舘村らしい教育とは何か**
5）学びの発信	○子ども達の発信する機会が少ない ○震災復興＝受け身 ○村をあげて良いところを大きく発信	○地域おこし協力隊が発信（10 月～）	**○受け身なだけでなく自らの発信が必要ではないか**
教育―2. 社会教育			
6）社会教育	○高齢者向け継続プログラムがない ○送迎の問題 ○社教事業との兼ね合い	○男性向け講座ができるといい（スマホ・料理教室） ○福祉分野と連携	**○ライフステージ毎の課題は何か** **○ライフステージ毎の教育をどうつくるか** **○他の分野との横断的な連携が必要** ※1）～7）と相関

視点	問題点	今後の展望	共有されたこと
文化			
7）文化・芸能	○伝統芸能の継承・地元に跡継ぎがいない※9）と相関 ○文化財の保護・保存 ○伝統文化の発信・継承 ○伝統芸能の継承		○今の生活に伝統芸能は結びついているか？ ※1）、4）と相関
その他			
8）大人の交流	○村民同士の交流の場がない ○転入してきた子どもの保護者の交流が大変		○**交流の場が必要**、常設の場所でなくとも、きこりや復興住宅の集会所等活用できないだろうか
9）人材	○司書がほしい ○スクールバスの助手がいない（朝 5 時から勤務） ※2）と相関 ○離職率が高い		**○退職した有資格者に活躍してもらえないだろうか** **○村内だけでなく広域での連携で活路が開けるのではないか** **○バスの仕組み等検討する必要がある** ※1）～7）と相関
10）施設	○スポーツ施設等充実しているが、合宿を受け入れるところがない ○村民体育祭がなくなった	○スポーツ公園利用活用施策（合宿等）	○充実した施設をもっと活用し村外との交流をはかりたい

（4）防災・建設・行財政部会			
視点	**問題点**	**今後の展望**	**共有されたこと**
防災			
1）安全・安心	○外灯の不足 ○防災無線がない ○人員・予算の問題や、計画策定のむずかしさ	○外灯の設置 ○防災ヘリポートの整備 ○ドローンの活用	○**最新技術**を使って**安全・安心を確保**できないか
2）消防対策	○消防団員の不足（地域毎にバラつき有）	○消防団の分団・部の統廃合の検討	○行政区の再編と合わせて、**消防組織を再編、強化**できないか
3）防災対策	○ハザードマップ未整理、各地区の基準がない ○自主防災組織が機能していない ○防災訓練が自主的に実施されていない ○住民向けの防災施策の周知手段、根拠が不足	○簡易的な防災訓練の実施 ○防災に関する地区ごと WS の開催	○**地区が主体**となって**防災対策**を検討できないか
建設			
4）足の確保	○バスが不便（目的地、終了時間） ○移動が自由に出来ない人が多い ○村内にタクシー会社がない	○冬期間の足の確保 ○買い物専用バスの検討 ○スクールバスの空き時間の活用 ○タブレットの活用など、リアルタイムバス情報提供	○スクールバスなど**既存交通も活用**しながら**冬期間も含めた移動手段を確保**、あわせて**情報提供の充実**ができないか
5）生活利便性	○高齢者の一人暮らしが多い ○買い物・通院・郵便サービスなどが不便 ○移動販売があるが周知されていない ○除雪の人手不足 ○村 HP　知りたいことにたどりつきにくい	○お店や企業の誘致 ○郵便局との連携 ○イベントが一目でわかるカレンダーを HP に	○**移動販売や郵便局との連携**、**HP による情報提供の充実**などにより、生活利便性を確保できないか
6）住環境	○村営住宅、高齢化（施設の草刈り）や住宅の老朽化により維持管理が大変 ○草刈りが大変、機械を使える人が少ない	○ベットタウン住宅地整備 ○IC からのアクセス道路や幹線道路など、災害に強い道路ネットワークの整備	○**住宅地、ネットワーク整備**などを合わせて住みやすい環境整備ができないか
7）景観整備	○田園風景保全には、農業の再生、担い手が課題	○採石場の植栽など、景観整備	○農業、採石場など、**産業のあり方**と連動した景観整備を検討できないか

視点	問題点	今後の展望	共有されたこと
行財政			
8）村の自立	○収入より支出が多く、若者より高齢者が多い ○村外居住者が多く、行政への依存が高まっている ○村職員の専門知識の不足	○税金の増収、来村者の増加など、村の収入確保 ○補助金頼りから自立へ ○村民同士の交流拠点・場所の確保 ○村民の自立	○高齢化が進み、村外居住者が多い中で**村民の自立意識**をいかに取り戻していくか
9）移住・定住の促進	○新規就農希望の移住者が多いが、年齢層が高い ○村営住宅は移住者の希望が多いが、空きがないため、移住相談を断っている ○空き家は広くて高いため、ニーズに合わない ○空き家バンクがあるが、登録が少ない	○福祉と相談して移住を支援する	○移住希望者の受け皿としての**村営住宅や空き家の活用**などができないか
10）広域的な連携	○福祉で助け合い運送を実施しているが、目的が限られている	○医療福祉での連携が必要	○村単独では実施がむずかしいことについて、どのように**連携**を図っていくか
11）行政区の再編	○行政区で担うべき役割が果たせず、役場の負担増 ○行政区を再編してもうまく機能するのか？ ○地区ごとに活動の方法や温度差に開きがある ○行政区が大きくなるとケアが大変	○行政区の再編、行政区との連携を検討	○**行政区と役場がうまく連携**して機能を果たすためにどのように再編すべきか

４．出席者

（１）健康・福祉・環境部会

区分	氏名	第１回	第２回
福祉係	髙橋　政彦	欠席	〇
住民係	糯田　文也	〇	〇
健康係	國分　志保理	〇	〇
包括支援センター	菅野　奈央	〇	〇
村民	菅野　一代	〇	〇
社会福祉協議会	安齋　香	〇	〇
いいたてホーム職員	鴫原　やすえ	〇	欠席
【部会長】有識者（福島大学）	鈴木　典夫	〇	〇

（２）産業・観光・移住部会

区分	氏名	第１回	第２回
農政第一係	齋藤　博史	欠席	〇
商工労政係	椛澤　博一	〇	〇
税務係	瀬川　雅幸	欠席	〇
【部会長】村民	大内　亮	〇	〇
村民	木幡　悦子	〇	〇
村民	花井　由貴	〇	〇
村民	山田　豊	欠席	〇
有識者（福島大学）	岩崎　由美子	〇	〇

（３）教育・文化部会

区分	氏名	第１回	第２回
学校教育係	荒　真一郎	欠席	〇
生涯学習係	今野　智和	〇	〇
生涯学習係	菅野　弘美	〇	〇
村民	草野　周一	〇	〇
村民	佐藤　義幸	〇	〇
村民	庄司　幸夫	〇	〇
村民	星　貴弘	〇	〇
【部会長】有識者（福島大学）	天野　和彦	〇	〇

（４）防災・建設・行財政部会

区分	氏名	第１回	第２回
土木係	松下　貴雄	〇	〇
財政係	伊藤　博樹	〇	〇
総務係	草野　健太郎	〇	〇
村民	川村　仁	〇	欠席
村民	濱田　幸成	〇	〇
村民	庄司　栄伸	〇	〇
村民	松林　りか	〇	〇
【部会長】有識者（福島大学）	村上　早紀子	〇	〇

５）中間報告会及び１月２４日の開催案

１．中間報告会

今年度の進捗状況を中間段階で村民向けに報告会を行う。令和２年２月頃に実施予定。

２．１月２４日（第３回策定委員会・第５回専門部会合同）開催案

◆目的

専門部会での概ねの取組み内容を、他の専門部会と策定委員会で共有し、方向性の妥当性を確認するとともに、部会間の連携の可能性を検討する。このため、第３回委員会と第５回専門部会を同時開催とする。

◆内容

各専門部会の検討内容の発表、取組みの方向性と部門間の連携の可能性を協議する。

◆開催スケジュール（案）

時　　間	進　行　内　容	進行役又は発言者
18:30	１．開会	委員長
18:30～18:45	２．計画策定の進捗報告等	事務局
18:45～19:10	３．専門部会の中間発表会 １部会５分程度×４部会	各部会長
19:10～20:25	３．議事　（意見交換・議事とりまとめ） １）部会の取組みの方向性について ２）部会間の連携の可能性について	委員長
20:25～20:30	４．その他 ５．次回の予定	事務局
20:30	６．閉会	委員長

【机の配置】

・第１回専門部会と同様に、部会ごとに机を配置

・専門部会に属していない委員と事務局の机を左右に配置

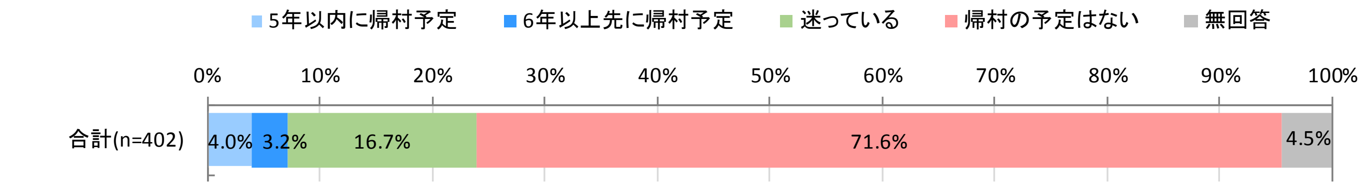
1.　村民アンケート結果

1-1.　回収状況（令和元年 10 月 31 日時点）

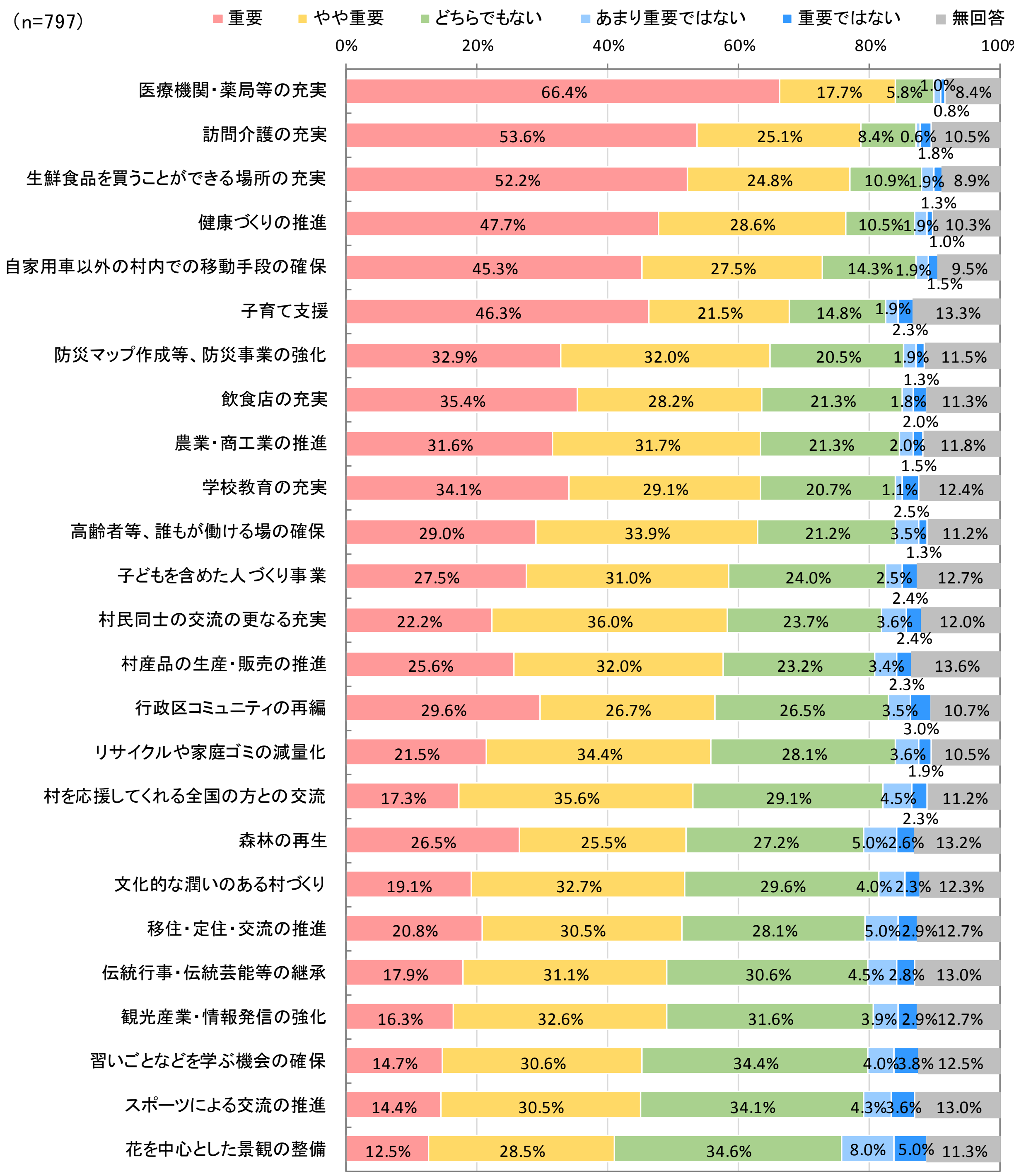
2,202 世帯 4,850 人（＝票）へ配布、回収率は世帯 21.8%、個人 18.8%

1-2.　帰村の意向

全体の約７割が「帰村の予定はない」と回答



1-3.　新しい村づくりで重要と考えること



2．　専門部会での検討内容

専門部会は４部会で構成し、次期計画での具体の取組み案を作成する。全９回を予定。

2-1.　健康・福祉・環境部会

	視点	問題点	対応の方向性
健康	1 健康	・成人病、ストレス等の不調が多い ・発達障害の子どものケア	・健康寿命向上のため、子ども達の健康管理や個別のカルテなどきめ細やかな対応が課題
	2 医療	・医療費、保険料負担の増加 ・人員不足	・いかに医療人材を確保し、医療サービスを充実させていくか
	3 スローフード	・食の安全が確保されていない ・郷土食レシピ作成が頓挫	・郷土食を軸とした子育て支援や、レシピの復活、継承が必要
	4 交流	・スーパー等買物だけでなく交流の機会であった場の喪失 ・村外居住者等との交流不足	・村内外の多世代が交流できる場が必要、キッチンカーの導入やコミュニティ食堂等を検討
	5 移動	・高齢者の移動手段が少ない ・村外への移動手段が少ない	・移動や交通のニーズを把握することが先決
	6 暮らし	・携帯電話が圏外 ・買物する場の不足 ・防災面での不安が増加	・最低限の生活利便性や安全・安心をいかに確保していくか
福祉	7 介護サービス	・帰村者の高齢者率が高い ・専門職員、受け入れ施設の不足 ・移動時間が長い	・在宅サービスや行政区毎の地区活動（サロン）の再開等介護サービスの不足をいかに解消するか
	8 子育て支援	・子どもや親子で遊べる場の不足 ・保護者の交流の場がない ・子ども達の通学時間	・村内外での母親教室等子育て支援 ・プレイパークや子どもの就学支援 ・子育てサポーターの活用
環境	9 環境	・空き家や空き地の管理 ・景観向上が望まれる	・交通量の多い県道周辺の環境を整えること、星空を楽しめるイベント等空間活用の必要性
	10　ごみ処理 資源循環	・イノシシ等害獣被害 ・距離や量などゴミ搬出に伴う困難	・震災前と異なる状況による困難といかに取り組むか
	11　ペット	・放し飼いの犬が危ない ・交通量が多くペットが事故に遭う	・震災前と異なる状況下で人とペットの安全をいかに確保するか
	12　村内の バリアフリー	・昇降路が長い	・村内では案内表示の工夫が必要・記録等の活用により「村民意識」の維持が望まれる

2-2.　産業・観光・移住部会

	視点	問題点	対応の方向性
産業	1 農業・商業・工業の活性化	・産業、農業の継続困難 ・人員、資金、ノウハウの不足	・新規事業先への支援 ・旧小学校や石材等資源の活用 ・人材の確保

	視点	問題点	対応の方向性
産業	2　雇用	・働く場、意欲の欠如 ・期間限定で人手がほしい	・働き手不足に対し、いかに「雇用主と働き手をマッチング」させていくか ・時間や職能等を柔軟にし、新しい働き手を増やす仕組み」が必要
	3　食	・飯舘の食を楽しめる場が少ない （食材、安心、場所等）	・「宿泊体験館きこり」の活用等、いかに「食で楽しむ機会・空間」を作るか
観光	4　観光	・食べ物や場所等観光資源の不足 ・住民の知識と村外への知名度不足	・既存の資源をいかに活用していくか ・村の案内人の育成が必要 ・飯舘ならではの世界への発信
	5　景観	・猿、猪の被害が多い ・フレコンバック、太陽光発電等景観をどう考えるか	・村民が学びあい、いかに「自然が感じられる村」を守りつつ「新しい景観」を取り入れていくか
	6　移動	・冬期の除雪やバス、タクシーも含めた高齢者の移動不便	・車がなくても移動出来る仕組みを構築することが必要
移住	7　移住定住	・若年層の減少 ・移住の受け入れ体制（ソフト面）	・いかに村民自身が積極的になり、心の距離を縮める行動を行うか
	8　生活利便施設	・薬局、ホームセンター等買物施設 ・小児科開設の要望	・道の駅の販売品目を増やす等いかに既存施設の付加価値をあげていくか
	9　地域コミュニティ	・総合計画での行政区の位置づけ ・地区計画は作成しないのか	・行政区のまとまりを維持していくための場や機会が必要
	10　関係人口の拡大		・人、観光、産業を網羅した「関係人口拡大」のスキームを構築することが必要

2-3.　教育・文化部会

	視点	問題点	対応の方向性
教育	1　学びの特色と発信	・ICT 授業、課外授業の不足 ・自ら発信する機会の不足	・特色ある学びを継続、充足させ、いかにその成果を発信していくか
	2　学習と通学の関係	・登下校の時間が長く、学習やプライベートの時間が確保しにくい ・バスの時刻不定と送迎のしにくさ	・いかに生徒たちの「放課後の時間」を充実したものとするか ・バスへの GPS 設置
	3　子どもの現状	・幼児増加に対し児童生徒が減少 ・専門職員の不足	・どんな子どもに育ってほしいのか、教育の方向性は共有されているか
	4　飯舘らしさ	・村を知らない村の子ども増加	・ふるさと学の必要性 ・飯舘らしい教育とは何か
	5　社会教育	・高齢者向け継続プログラムがない ・移動の問題	・ライフステージ毎の課題を整理し、他の分野との横断的な連携が必要
文化	6　文化・芸能	・文化、芸能の保存、継承、発信 ・継承者の欠如	・伝統芸能や村の文化は今の生活とどのように結びついているか
その他	7　大人の交流	・転入者も含め大人同士の交流の場がない	・交流の場が必要、きこりや復興住宅の集会所等活用した仕掛けができないか

	視点	問題点	対応の方向性
	8　人材	・司書、スクールバスの助手が不足 ・離職率が高い	・退職した有資格者の活用（広域連携） ・働く条件、仕組みの工夫
	9　施設	・合宿等の受け入れ体制がない ・村民体育祭がなくなった	・充実したスポーツ施設を活用し、村内外との交流が図れないか

2-4.　防災・建設・行財政部会

	視点	問題点	対応の方向性
防災	1　安心・安全	・街灯や防災無線等の不足 ・人員、予算の不足	・街灯、防災ヘリポートの設置 ・ドローン等最新技術の活用
	2　消防対策	・地域により団員が不足	・行政区再編と合わせ、消防組織を編成、強化できないか
	3　防災対策	・ハザードマップ未整理 ・自主防災組織が機能していない	・防災訓練や WS 等、地区が主体となって防災対策を検討できないか
建設	4　足の確保	・バス、タクシー等が不便、移動が自由に出来ない人が多い	・スクールバス等既存交通を活用しながら、買物や冬期の移動手段の確保、情報提供ができないか
	5　生活利便性	・高齢者の生活利便性（買物、通院、郵便除雪等）が確保できない ・村の HP や移動販売等、周知の不足	・移動販売や郵便局との連携、HP による情報提供の充実などにより、生活利便性を確保できないか
	6　住環境	・住宅の老朽化 ・高齢化による草刈等の人員不足	・住宅地や道路ネットワーク整備などを合わせて、住みやすい環境整備ができないか
	7　景観整備	・田園風景保全には、農業の再生、担い手の確保が課題	・農業、採石場など、産業のあり方と連動した景観整備を検討できないか
行財政	8　村の自立	・高齢化による歳入、歳出のアンバランス ・村外居住者の増加による行政への依存 ・村職員の専門知識の不足	・来村者の増加等村の収入確保 ・村民同士の交流拠点・場所の確保 ・高齢化が進み、村外居住者が多い中で村民の自立意識をいかに取り戻していくか
	9　移住･定住の促進	・新規就農希望の移住者は年齢層が高い ・村営住宅は移住者の希望が多いが空きがなく、空き家は広くて高いためニーズに合わない	・移住希望者の受け皿としての村営住宅や空き家の活用などができないか
	10　広域的な連携	・福祉で助け合い運送を実施しているが、目的が限られている	・村単独では実施がむずかしいことについて、どのように連携を図っていくか
	11　行政区の再編	・行政区で担うべき役割が果たせていない ・行政区の再編が必要か？ ・地区ごとに活動の方法や熱意に差がある	・行政区と役場がうまく連携して機能を果たすためにどのように再編すべきか